



桑野楓夏(くわの・ふうか)さん。筑紫女学園大学3年生の21歳。福智町金田出身。ボッチャ競技日本代表選手(BC1クラス)。昨年12月のドバイ2017アジアユースパラに出場。前回マレーシアで行われたアジアユースパラでは、銀メダルを獲得。

本気で打ち込める 目標を探して

先天性の四肢体幹機能障害から、車イスで生活してきた桑野楓夏さん。幼い頃から活発で何事にも積極的に取り組む性格でした。金田で生まれ育ちましたが、小学校はエレベーター設備の整った弁城小に入学。親の転勤で千葉県に転居する5年生まで福智町で過ごしました。スポーツでは水泳に挑戦

した桑野さん。しかし自力で息継ぎができず、大会への出場は叶いませんでした。「何か本気で打ち込める目標が欲しい」と探し続ける中、桑野さんが運命的にボッチャと出会ったのは、中学2年生の時でした。

桑野 楓夏

Fuka Kuwano

夢追つて

Dream Challenger

ボッチャと出会い 夢つかんだ銀メダル

偶然テレビで見た同年代のボッチャ選手の特集。自分と同じ境遇で世界の舞台で戦う姿が目に見え込んできました。衝撃を受けた桑野さんは「私も世界の舞台に立ちたい」という希望を胸に、すぐに競技を始められる場所を探しました。しかし紹介された協会は高齢者が多く大多数がリハビリ感覚。そのような中でも、桑野さんの本格的に競技に打ち込む意欲は、決して薄れることはありませんでした。

当初は約275gのボールを持つことさえも難しく、数メートル投げたのがやっとの状態。しかし世界を目指すという高い目標を掲げた桑野さんは、強い意志で自宅でも常にボールに触れるなど地道にトレーニングを重ね、徐々に大会で結果を残しはじめました。そ



「アジアユースパラ競技大会」ボッチャ種目のドバイ会場。雰囲気や環境の変化、大歓声に心が乱れないようイメージトレーニングも重ねてきたという桑野さん。

4年に一度、アジア30か国の15〜21歳の選手が競う障害者スポーツの世界的祭典「アジアユースパラ競技大会」。アジアパラリンピック委員会主催で12月10日から3日間、ドバイで行われた大会に「ボッチャ」日本代表として出場した福智町出身の21歳、桑野楓夏選手。日本から世界へ… 中学時代に抱いた夢を追い、ひたむきに努力を続けるその姿をお伝えします。



中東屈指の経済拠点で世界的な観光都市「ドバイ」。超高層ビルが立ち並ぶ摩天楼の中でも828mの「ブルジュ・ハリファ」は圧倒的な存在感。この世界一高いドバイの象徴を見渡す会場で、障害者スポーツの祭典が開催されました。

ボッチャ

Boccia

パラリンピックの正式種目で、重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障害者のためにヨーロッパで考案されたスポーツ。ジャックボール(目標球)と呼ばれる白いボールに、赤・青のボールをそれぞれ6球ずつ投げ合い、いかに目標球に近づけるかを競うルールです。相手のボールを狙ってはじく、進路をふさぐように手前でボールを止めるなど高度な戦略と正確性が求められます。

夢追つて

Dream Challenger





試合中、アシスタントとの会話は禁止。母・香乃さんは車イスの操作やボールの受け渡しなどサポートに徹し、静かに見守ります。

**ともに戦い
寄り添い続ける母**

「競技を始めて一番うれしかったのは、友達が増えたこと」と笑みを浮かべる桑野さん。海外選手と交換した各国のバッジが並ぶアクレカード（入場証）は、大切な宝物です。国際大会で対戦した選手たちとは、控室で記念撮影をしたり、連絡先を交換するなど積極的に交流。今でも連絡を取り合い、そのつながりは続いています。

千葉県でプレーしていた高校生のころはパラリンピックに3度の出場経験を持つリオデジャネイロの銀メダリスト・廣瀬隆喜さんなど二流の選手と交流。代表合宿でも廣瀬さんか

らの確かな指導を受け、桑野さんが兄のように慕う存在です。ドバイに立つ前も空港で激励を受けました。豊富な経験と独自の目線を持つ廣瀬さんは、桑野さんが世界で戦う上で大きな心の支えとなっています。

また、ドバイにも同行し、桑野さんの挑戦を「一番近くで見守り続ける母・香乃さん」。「結果を残してほしいと思ったことは一度もありません。ただ純粋に夢を追い挑戦する姿を応援しています」と娘の肩に手を添えました。日常生活の全般で娘を介助し、試合ではアシスタントとして共に戦う母・香乃さん。時に厳しく接することもありました。誰よりも娘を思い、一番の理解者として寄り添い続けています。



「バレーの攻撃のような感覚で投げる」桑野さんの上手投げ。

**在学中の目標は教師
将来の夢はパラリンピック**

「障害がある人が何か始めるのなら、まずボッチャを勧めたい。どんな人でもあきらめずに探せば、必ず自分に合った夢や目標が見つかると思います」と経験から語る桑野さん。現在はサポートを受けながらも自分で投球するクラスですが、数年前から障害の度合を考慮し、補助器具を使って投球するクラスへの転向を勧められてきました。転向すれば東京パラリンピックの代表を狙えるとも言われましたが「自分の手で投げたい」との強い思いから、そのままのクラスで挑戦を続けています。

前大会の銀メダリストとして注目され研究されていた桑野さん。「知るからこそ目指す目標がある」と次につなげ、挑み続けます。



「今の実力では厳しいけど、パラリンピックは最大の目標。多くの出会いに感謝し、これからも頑張りたい」と力強く語った桑野さん。現在は筑紫女学園大学で学び、特別支援学校の教師になるというもう一つの目標も掲げています。迷うことなく前を見据え、ひたむきに夢へと向かう挑戦は、これからも続いていきます。



**「感謝とチャレンジを忘れず
夢をもって進んでいきたい」**



ドバイでのアジア大会でプレーする桑野楓夏さん。そのコートの奥で祈るように展開を見守る母・香乃さん。

Dream Challenger



**厳しい状況でも
あきらめない粘り強さ**

障害の度合に応じた4つのクラスがあるボッチャで、桑野さんは車イスの操作やボールの受け渡しなどのサポートを受けるBC1クラス。しかしマヒの強い桑野さんは同クラスでもさらにハンディを抱えています。5指すべてにマヒがあるため、10mのコートの中で5〜6mしか投げることはできません。その不利を補うため、自分がジャックボールを投げられる先攻時はできるだけコートの手前で戦うことを心がけているそうです。後攻時は、研究してきた相手にロングスローを狙われるため、相手の攻撃を防ぐようにボール



【ドバイ】アラブ首長国連邦を構成する首長国のひとつで、アラビア半島最大の商業都市。人口は約244万人。

を並べてしのぐしかありません。こうして厳しい状況でも戦術を駆使して粘り強く勝利を重ね、選考会と3度の選抜合宿を勝ち抜き、12人の日本代表選手に再び選ばれました。

そして迎えたドバイでのアジア大会。21歳の桑野さんは、ジュニアとしては今大会が最後のチャンス。前大会の実績から期待を集める中、自身もメダル獲得を目標に試合に臨みました。しかしパワーが強い海外選手のロングスローに苦しみ、健闘するも僅差で予選敗退。悔しい結果でしたが「世界のレベルをあらためて肌で感じることはできた。これからのシニアでの戦いにこの経験を生かしたい」と笑顔で前を向き、ジュニア最後の挑戦に幕を下ろしました。

アジア30か国から715人もの選手が参加したドバイ大会の華々しい開会式。日本からは7競技で86人の選手が参加しました。

